

VIII 授業実践 平成30年10月 - 6年 音楽科 -

「黒鍵の音楽をつくらう」

○**題材のねらい** 旋律の役割を理解して、グループで旋律の重ね方や構成を工夫し、どのような音楽をつくるかについて思いや意図をもつことができる。

○**指導計画（全7時間扱い）**

- 1 音楽を構成する旋律の役割を知る。
- 2 役割に合う旋律をつくる。
- 3 テーマに合った音楽をつくる。
- 4 重ね方を工夫してテーマに合った音楽を構成する。
- 5 テーマを表現できるように、表現の仕方を工夫する。【本時】
- 6 互いの表現のよいところを聴き合う。
- 7 旋律の役割を聴き取って音楽を味わう。

○**協働的学習 つくる**

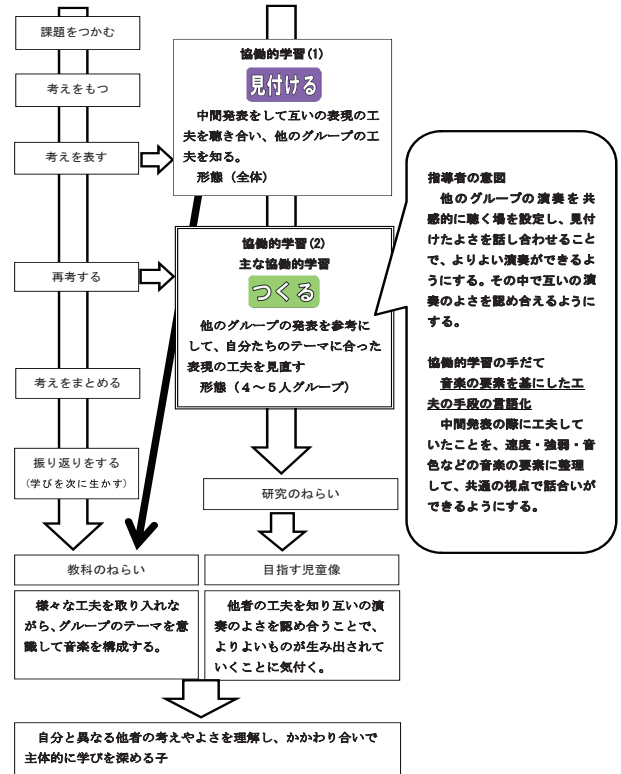
《協働的学習の活動》

- ・他のグループの演奏を聴き、自分たちのグループにはない工夫を見付けたり話し合ったりすることで、自分たちのグループの表現を見直したり深めたりする。

《協働的学習の手だて》

- ・中間発表の際に工夫していたことを、速度・強弱・音色などの音楽の要素に整理して、工夫の手段を言語化することで、共通の視点で話し合いができるようにする。
- ・『聴きタイム』『聴かせタイム』『取り入れタイム』を自分たちが必要な時に要求できるようにし、必要感をもって主体的に他のグループと関わる機会をつくる。

重視した協働的学習の種類・学習モデル



○**成果と課題** <講師 東京学芸大学教職大学院准教授 細川 太輔 先生>

- ◎「もっと工夫はないかな。」と、児童が主体的に新しいものをつくり出すというチャレンジ精神がよかった。
- ◎アドバイスがほしいと思ったときに『〇〇タイム』が発動されるのがよい。また、児童が必要感をもっている児童主体の時間であることがよい。
- ◎みんなの意見を取り入れながら合意形成がなされていた。
- ◎考えたことをすぐに実行できる場があるのがよい。
- △振り返りでは、「これができていたからよい」という評価のための学習になるのではなく、児童の思いを大切にしたい記述式の振り返りを重視する。
- △「他の班に聴いてもらいたい。」と思えるような環境を整えることが大切である。

平成31年2月 - 4年 体育科 -

「体づくり運動領域 (多様な動きをつくる運動)」

○単元のねらい

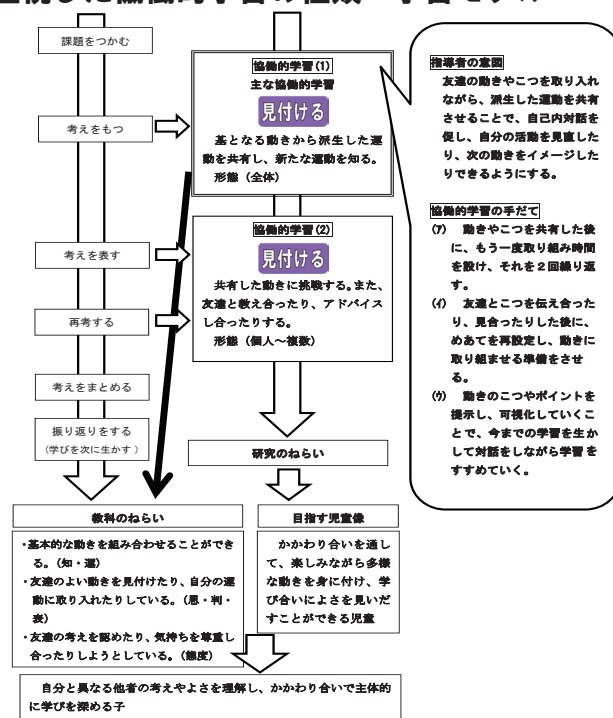
- ・体のバランスを取ったり移動したりする動きや、用具を操作したり力試しをしたりする動きを身に付けるとともに、それらを組み合わせることができる。(知・運)
- ・多様な動きをつくる運動の行い方を知り、友達のよい動きを見付け自分の運動に取り入れることができる。(思・判・表)
- ・運動に進んで取り組み、きまりを守り仲良く励まし合って運動したり、場や用具の安全に気を付けたりすることができる。(態度)

○指導計画 (4時間扱い)

- 1 友達と励まし合い、誰とでも運動に取り組むことができるようにする。(用具を操作する運動)
- 2 友達のよい動きを見付けたり自分の運動に取り入れられたりすることができるようにする。(基本的な動きを組み合わせる運動)
- 3 友達のよい動きを見付けたり、自分の運動に取り入れられたりすることができるようにする。(サーキット形式①)
- 4 友達のよい動きを見付けたり、自分の運動に取り入れられたりすることができるようにする。(サーキット形式②)



重視した協働的学習の種類・学習モデル



○協働的学習 見付ける

《協働的学習の活動》

- ・友達と教え合ったり、一緒に取り組んだりしながら、共有した動きに挑戦することで、いろいろな動きを体験する。
- ・基となる動きから派生した運動を共有し、自分と異なる他者の動きやよさを理解することで、新たなめあてを設定したり、修正したりする。

《協働的学習の手だて》

- ・一単位時間の中に「もう一度取り組む」時間を設けた。友達と共有したことをもう一度自分で取り組ませ、友達から得たこつやポイントをすぐに試し、生かすことができるようにした。
- ・「共有→挑戦」の学習サイクルを2回繰り返すことで、基となる動きを押さえながらいろいろな動きに取り組むことができるようにした。

○成果と課題 <講師 東京学芸大学教職大学院准教授 細川 太輔 先生>

- ◎「共有→挑戦」を繰り返すことで合意形成が自然と行われ、児童は協働の質を高めていくことができた。
- ◎自分ができない動きを友達に聞いたり得意な子が教えたりできる状態を仕掛けることで、個から集団の活動に変わっていった。
- △本時の(協働の)最終ゴールは何かを明確にさせる必要がある。
- △一人でできるようになることも大切だが、集団だとより大きな課題が達成できるようになることやその喜びをもう少し実感させたい。

令和元年5月 - 6年 国語科 -

「随筆作家になろう」

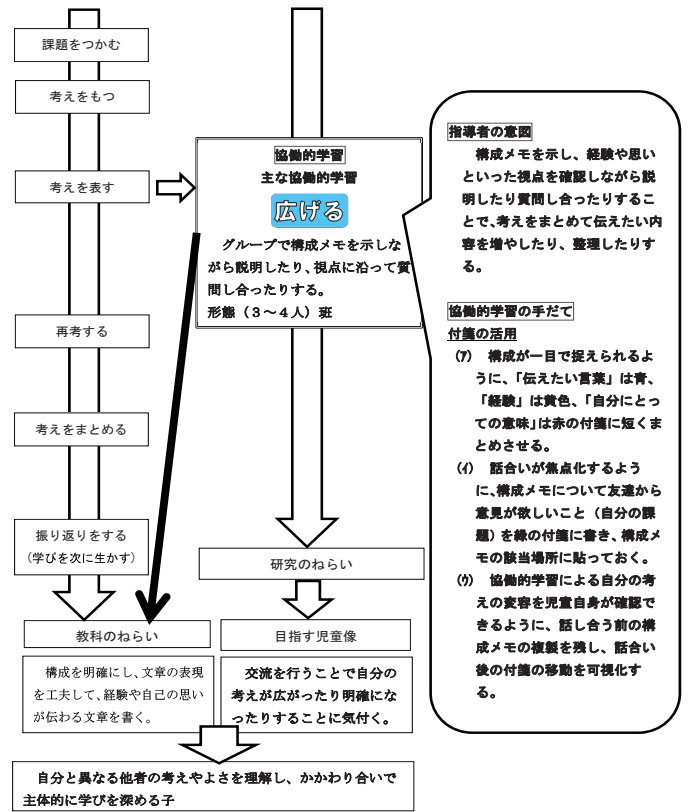
○単元のねらい 経験から書くことを決め、自分の思いや考えが明確になるように、構成や表現を工夫して書くことができる。

○指導計画（7時間扱い）

- 1 「随筆」に触れて、学習計画を立てる。
 - 2 随筆の特徴を見付ける。
 - 3 話題を決めて、構成を考える。
 - 4 経験や気持ちが伝わるように、構成を考える。
- 【本時】
- 5 経験や気持ちが伝わるように表現の工夫を考える。
 - 6 「忘れられない言葉」の随筆を書く。
 - 7 随筆を紹介し、よいところを伝え合う。



○重視した協働的学習の種類・学習モデル



○協働的学習 広げる

《協働的学習の内容》

- ・書き手が相談したいことを記した付箋を基に、内容や構成についての質問や説明をして話し合う。
- ・3人グループでお互いの構成メモを読み、気付いたこと等を付箋で貼って、再構成の場面で活用させる。

《協働的学習の手だて》

- ・構成が一目で捉えられるように、「伝えたい言葉」は青、「経験」は黄色、「自分にとっての意味」は赤の付箋に短くまとめて書くことにした。
- ・話し合いが焦点化するように、構成メモについて友達から意見がほしいこと（自分の課題）を緑の付箋に書き、構成メモの該当場所に貼っておくことにした。

○成果と課題 <講師 東京学芸大学教職大学院准教授 細川 太輔 先生>

◎焦点を絞った推敲をしないと、構成の課題には気付けないので、児童の疑問を基に話し合っていたことがよい。

◎単元始めの構成メモを複写して残し、話し合った後でその下に構成の付箋を貼り直した。これにより、協働的学習を通して自分の考えが変容したことが視覚的にも捉えることができよかった。

△構成は、順序と合わせて分量も重要である。高学年は構成図のような形で考えさせると入れ替えることも可能となる。どの内容に一番多くの紙面を割いたらよいのか、どの内容を残すのかなど、取捨選択も必要である。

「数の見方」

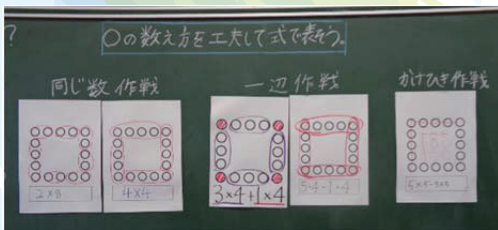
○ねらい ドットを数える方法の共通点を統一的に捉え、見付けたきまりを用いて発展的に課題の解決の仕方を考えることができる。

○協働的学習の様子



式と図を関連付けた交流

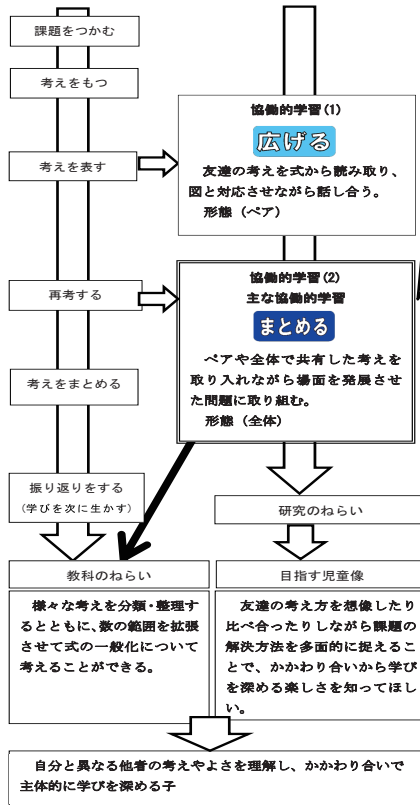
ネーミングで理解を深める



考えの共通点を共有する



○重視した協働的学習の種類・学習モデル



指導者の意図

- ・考え方を分類、整理し、ネーミングすることで、それぞれの考え方について理解を深める。
- ・それぞれの考え方の共通点に着目することで、ドットの数が増えた場合の課題解決の仕方について発展的に考えたりする。

協働的学習の手だて

- (7) 式と図の関連
 - 式を発表する児童と、式にある数値がドットのどの部分にあたるのかを説明する児童を別にする
 - ことで、式から考えを読み、児童が交流する中で学びを深める機会を多く設けた。
- (4) 発展的な場面の設定
 - 解決した問題を基に、新しい問題を考えさせることで、本時に見付けたどの方法でも課題の解決が可能であったかを児童が主体的に話し合うことができるようにする。

○協働的学習 まとめる

《協働的学習の内容》

- ・考え方を分類、整理し、ネーミングすることで、それぞれの考え方について理解を深める。
- ・それぞれの考え方の共通点に着目することで、ドットの数を数える方法を統一的に考えたり、ドットの数が増えた場合の課題解決の仕方について発展的に考えたりする。

《協働的学習の手だて》

- ・式を発表する児童と、式にある数値がドットのどの部分にあたるのかを説明する児童を別にする
- ことで、式から考えを読み、児童が交流する中で学びを深める機会を多く設けた。
- ・解決した問題を基に、新しい問題を考えさせることで、本時に見付けたどの方法でも課題の解決が可能であるかどうかを児童が主体的に話し合うことができるようにした。

○成果と課題 <講師 目黒区立八雲小学校長 長谷 豊 先生>

◎式のみを伝え、図を使って説明し合う活動を通して、児童は相互に理解を深めることができた。

◎場面を発展させた問題を再構成の場に設定することで、ネーミングを工夫したそれぞれの考え方のよさや関連性について追究することができた。

△協働的学習を取り入れるタイミングが重要である。児童にとって「解いてみたい。」「考えてみたい。」と思ったときに話し合いの場を設けることで、児童主体の深まりのある協働的学習につながる。